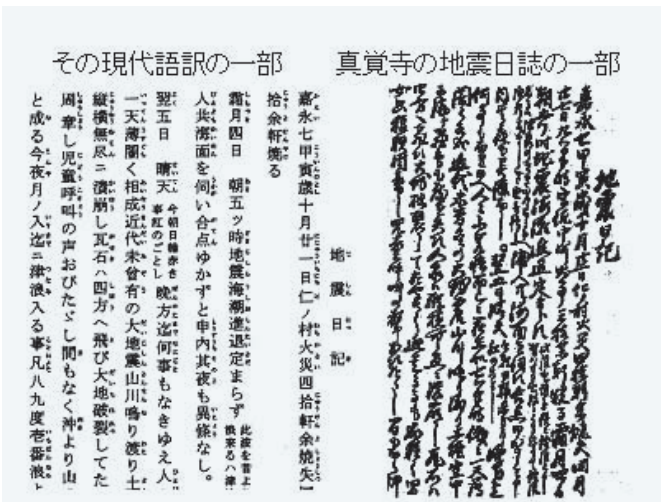


江戸



▲真覚寺日記解説書



宇佐湾を望む真覚寺▶

背景

高知県の真覚寺には、「地震日記」九巻と「晴雨日記」五巻からなる「真覚寺日記」が保存されています。これは、当時の住職であった井上静照師が、安政東海地震が起こった嘉永7年(1854)11月4日から慶応四年(1868)までの15年間にわたって記した日記です。ここでは、嘉永7年11月5日に起こった安政南海地震に関する記述を現代語訳にして概要を示しています。

アクセス 真覚寺

- 宇佐漁港より東北東へ直線距離約200m
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度 北緯33度27分10秒, 東経133度27分13秒



嘉永七年(安政元年・一八五四)十一月四日の安政東海地震発生翌日、五日の安政南海地震の土佐市宇佐町の様子が真覚寺の住職の日記に次の様に記されています。

翌五日晴天。今朝は太陽がまるで紅のように赤い。晩方まで何事ありませんでしたが、午後五時頃にわかに空が薄暗くなり、未曾有の大地震が山川に鳴り渡り、土煙が空中にまん延し、飛ぶ鳥も度を失いました。人家は縦横無尽に崩れ、瓦は四方に飛び、大地は破裂して容易に逃げることもできず、男女はただ狼狽し、子どもは泣き叫びました。

間もなく沖から山のような大波がやって来て、宇佐、福島一面が海となりました。今夜月の入りまでに津波がおおよそ九度押し寄せ、一番目の波から二番、三番の引き潮で浦中がみな流されました。総じて地震の時の潮は、進むときは緩やかで、引く時は急です。福島と中須賀の間は家が一軒も残らず、渭ノ浜の山際まで波が入っていききました。宇佐は流れ、残った家はわずかに六〇軒であり、このうち二〇数軒を除いては、家は残っているものの、修繕はできないほどになりました。

波が来た時に、諸道具を捨て置き山に逃げた人はみな命が助かり、金銀雑具に目をかけ油断した者はことごとく溺死しました。流死した人は福島で五〇余人、宇佐で一〇余人に及びました。